

二国間交流事業 共同研究報告書

平成 23年 4月 12日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

共同研究代表者所属・部局 筑波大学・大学院人文社会科学研究所

職・氏名 (ふりがな) 教授・ やまだ しげお 山田 重郎

1. 事業名 相手国（日仏交流促進事業<SAKURA>）との共同研究 振興会対応機関 （仏外務省）

2. 研究課題名 紀元前2千年紀におけるハブル河谷の歴史地理
The Historical Geography of the Habur Valley in the Second Millennium BC

3. 全採用期間

平成 21年 4月 1日 ~ 平成 23年 3月 31日 (2年間)

4. 経費総額

(1) 本事業により執行した研究経費総額 1,690,603円

初年度経費 1,000,000円、 2年度経費 690,603円、 3年度経費 円

(2) 本事業経費以外の国内における研究経費総額 50万円

5. 研究組織

(1) 日本側参加者（代表者は除く）

氏名 <small>(ふりがな)</small>	所属・職名	研究協力テーマ
ぬもとひろとし 沼本宏俊	国士舘大学体育学部・教授	テル・タバンの考古学的研究
しばだいすけ 柴田大輔	筑波大学人文社会科学研究科・助教	テル・タバンの文書研究
ありがのぞむ 有賀望	筑波大学人文社会科学研究科・院生	コロキウム・コメンテーター
なかにちろう 中田一郎	(財) 古代オリエント博物館・館長	マリ文書研究
つきもとあきお 月本昭男	立教大学文学部・教授	エマル文書研究
やまだまきみわ 山田雅道	立教大学文学部・非常勤講師	エマル文書研究
いけだじゅん 池田潤	筑波大学人文社会科学研究科・教授	コロキウム・コメンテーター
かはしふみ 唐橋文	中央大学文学部・准教授	コロキウム・コメンテーター
かわさきやすし 川崎康司	早稲田大学文学部・非常勤講師	コロキウム・コメンテーター

(2) 相手国側研究代表者

所属・職名・氏名 C N R S ・ Chargée de recherch  CNRS, habilit e   diriger des recherch 
Nele Ziegler

(3) 相手国参加者（代表者は除く）

氏名	所属・職名（国名）	研究協力テーマ
Dominique Charpin	professeur � l'�cole Pratique des Hautes �tudes, IVe section, Sorbonne	マリ文書研究
Jean-Marie Durand	professeur au Coll�ge de France, directeur de l'UMR 7192	マリ文書・エマル文書研究
Lionel Marti	chercheur au CNRS, UMR 7192	マリ文書・エマル文書研究
Michael Guichard	charg� de conferences, universit� Paris I, Sorbonne	マリ文書研究
Christophe Nicolle	charg� de recherch� au CNRS, UMR 7192	ハブル地域の考古学的研究

6. 研究実績概要（全期間を通じた研究の目的・研究計画の実施状況・成果等の概要を簡潔に記載してください。）

研究目的：

本研究計画は、紀元前2千年紀のハブル川流域の歴史地理を明らかにしようとするものである。当該地域に関する大量のデータを含む古代都市マリ（現テル・ハリリ遺跡）に由来する楔形文字文書を研究するフランスの研究チームとハブル川流域に位置し日本隊（国士舘大学）の発掘により近年多数の楔形文字史料が出土しているテル・タバンの遺跡の史料を研究する日本の研究チームがデータを提供し合い、互いの知見を交換することで相互補完的な研究協力体制を築き、新たな研究成果を生み出すことを目指した。

研究計画の実施状況：

上述の研究目的を果たすため、日本とフランスにおいて、それぞれ2度、合計4度の国際会議を行った。第1回は、2009年11月21-23日に東京で行われた国際コロキウム（Formation of Tribal Communities – Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria；代表：大沼克彦 [国士舘大学]）の直後、11月25日に筑波大学において開催した。第2回は2010年3月17日にコレージュ・ド・フランス（パリ）において、第3回は2010年10月9-10日に筑波大学において、第4回は2011年3月23日にコレージュ・ド・フランスにおいて行った。これらの国際会議において、研究計画のメンバーである研究者による研究発表とそれを受けての活発な意見交換が行われた。また、当該研究に関心をもつ他の研究者ならびに学生もこれらの会議に参加し、最新の研究成果と学問的議論を共有した。以下に記すように、これら国際会議で発表された研究成果は2011年末までに国際的に流布する学術雑誌（*Revue d'Assyriologie et d'Archéologie orientale*）に出版する予定である。

研究成果：

テル・タバンのマリとマリの2つの遺跡に由来する文書史料のデータと日本とフランスの発掘調査から得られた当該地域についての考古学的データを提示し、相互補完的に提供されたデータを検討することで、前2千年紀の長期間にわたる多様な政治地理学的脈絡における当該地域の歴史的・文化的諸相が明らかになった。紀元前2千年紀後半にテル・タバンの周辺を指す地理的表現「マリの地（*māt Mari*）」は、紀元前1760年にバビロンのハンムラビにより破壊されたユーフラテス中流域の中心都市マリについての記憶に起源をもつものであることが様々なデータに基づいて示された。古バビロニア時代のマリの住民とポスト・ハンムラビ時代から前2千年紀後半にかけてのテル・タバンの住民にどのような血縁的・社会的関係があったかは確認し得ないが、両者の社会文化的・思想的連続性は、暦（特に月名）、祭儀、法的基準、度量衡、書記伝統等に認められる明確な共通性によって十分に証明された。